

航海の段およびアルミードの園の段

—『解放されたエルサレム』第十五歌七節から第十六歌最後まで—

Il Canto della navigazione e il Canto del giardino di Armida

—La traduzione del Canto 15 (dalla strofa 7) e del Canto 16 della *Gerusalemme liberata*—

水野 留規

MIZUNO Ruki

Il Canto XV describe il viaggio di Carlo e Ubaldo che, dopo aver

attraversato il Mediterraneo, varcano le colonne d'Ercole e navigano fino all'isola in cui Rinaldo, caduto nell'oblio dei suoi doveri guerreschi, sta fra le braccia della maga Armida. Nel giardino di Armida, descritta nel Canto XVI, un papagallo canta ai due soldati in cerca di Rinaldo la favoletta moraleggiante: come la bellezza della rosa è di breve durata la vita dei mortali, per cui conviene cogliere le gioie, quando la giovinezza è ancora fresca.

第十五歌 (前回の続き) (一)

地中海西進

七 気高き二人連れを婦人は舟に乗せると、土手を櫂で突いて、舳い綱を解く、そして風に向けて帆を揚げると、座つて舵を取り、進路を定める。川は増水しているので、河口に向かって船舶の流れに乗せて運ぶことができる。しかしこの舟は非常に軽いので、先頃降った雨によって水嵩をさほど増さなかった他の如何なる川でも、この舟を持ち上げることができるであろう。八 自然界の理を超え速さの風が帆を揚げた舟を海の岸辺に向けて押し進める、水は白い泡を立てて白く染まり、航跡で音を立てるのが聞こえる。見よ、かれらはすでに川が静かに流れる川幅の広いところに達しようとしている、そこでは川が海の大きな渦と一つになるので、川でなくなったり、川でなくなったりのように見えたりする。九 荒れた状態にそれまであった海の端に驚異の舟が到達するや否や、雲は消散し、暗い雲を広がらせていた

重たい南風が風ぐ。軽やかな風が連なる波の山を均し、青く美しい懐〔海〕にさざ波だけを立てる、これ以上に明るく照らされた自らを見た例がない空は、穏やかに広がった晴天を喜んで微笑む。十 小舟はアスカローナの町を過ぎ、左手に舵を切って西へと向かい、ガザの町——この町はかつて同名の町の港であったが、その旧ガザの破壊によって発展し、非常に大きくて強大な町となった——に近づく。町の海岸部にはこの時、砂粒の数とほとんど同じくらい多くの人々がいた。十一 陸地に目を向けた二人の兵士は、多くの天幕がそこにあることを見て取った。騎士たちや、町と海岸の間を行き来する歩兵たちの姿もあり、砂埃の上がる道を運搬の駱駝や象が通っている。さらには港がある入り江の奥に船が停泊し、錨に鎖で繋がれているのも確認された。十二 帆を広げている船もあれば、きびきびと素早く櫂を漕いで進む船もある、櫂や船嘴に打たれて湾の柔らかな波はあちらでもこちらでも泡立つ。すると婦人が言った、「海岸も海も異教徒で一杯ですが、かの強大な独裁者〔エジプト王〕は軍勢をまだ一つに集結させていないのです。十三 エジプト王はこれらの兵をエジプト国内とその周辺から集めました。かれの王国はとても広く、東と南に向かつて遠くまで伸びていますので、いまは遠方の地から来る連中を待っています、ですから、かれが野営の陣を動かすのに先んじて、われわれはこの地に戻ってきたいと思います。エジプト軍の指揮官には王自身、もしくはその代わりの者になるでしょう。」十四 婦人が話している間、ほかの鳥に囲まれても安定した飛翔を保つ鷹が上昇する時に太陽に近づきすぎてその姿が見えなくなるように、かのじよの舟はエジプト軍の船の合間を——追跡されたり拿捕されたりすることを心配ある

いは警戒する余地もないほど——飛ぶように進み、エジプト軍の船から離れ、人々の視界から消え去る。十五 対岸のレッフィアにたちまち到着するが、この町はエジプトからシリア〔パレスチナ〕にやってきた人が最初に入る町である。続いてリノチエーラの乾ききった海岸が現れる。そこから遠くないところに高木に覆われた頂を海に向けて突き出した山〔カシウス山〕があり、麓は荒波に洗われているが、その土中にはポンペイウスの遺骨が眠っている。十六 次に一行はダミアータの町を発見する、またナイル河が如何にして天界の水を海に捧げているかを——それは七つの有名なその扉と百の小さな河口から海に注がれるのだが——理解する。そして強国ギリシャによってギリシャの民のために建設された町〔アレクサンドリア〕にさしかかり、かつてはこの町の海岸から遠く離れていたが、今では海岸とながっているファロー島を通り過ぎる。十七 北の方角にあるロドス島とクレータ島は遠いため、アフリカの海岸に沿って進む婦人の舟からは見えない。アフリカの海辺には耕作に適した肥沃な土地があるが、内陸部に見いだされるのは不毛の砂地と、多くの野獣だけである。舟はマルマリカ地方の沿岸に達し、五つの町があったチレーネ地方の大地をかすめる。近くにはトロミッタがあり、静かに水を地表に送り出している伝説のレーテ川も見える。(四) 十八 航海者にとって危険な大シルテ湾を後にして舟は海岸から離れて沖合へ出る、ジュデッカ岬を過ぎ、やがてマグラ河の河口を越える。海岸にはトリポリの町が現れ、それと向かい合って、波の合間に隠れるようにマルタ島が横たわっている。そして後方にはもう一つのシルテ湾とともにアルゼルベ島があり、そこにはかつて連の実を食べる人々〔ロートパゴイ〕が住

んでいた。十九 湾曲した海岸部に一行はトゥニジの町——豊かで栄
 誉あるこの町はリビアで名を馳せたどの町と比べても遜色ない——を
 見るが、湾を挟んだ双の岬にはそれぞれ山が聳えている。湾の横には
 シチリア島が座し、そのリリベオ岬が湾の正面に迫っている。この場
 所に来たとき、婦人はカルタゴの町があつた場所を二人の戦士に指さ
 す。二十 高く聳えるカルタゴ^(五)〔と古の詩に歌われた町〕はいま
 や低く横たわり、海岸部が廃墟の跡をわずかにとどめているにすぎな
 い。多くの都市が減び、多くの国が減び、華やかな繁栄は砂と草に覆
 われる、人々は自らが死を帯びていることに憤る。嗚呼、貪欲と高慢
 に囚われた人間の心よ！かれらはその後ビゼルトに到着し、サルデー
 ニヤの島を反対側のはるか遠くに認める。二十一 一行はヌミディア
 の人々がかつて流浪の生活を営んでいた平原を通り過ぎた。悪名高き
 海賊たちが暮らすブージャとアルジェリの町を見て、その先にはオラ
 ンを見る。獅子や象が生息し、今ではモロッコとフエッサの王国に
 支配されたティンジャーナ地方の岸辺を航行し、反対側に位置する
 グラナタ地方を越える。

未知の海へ

二十二 一行はすでに海が陸の間に割り込んである場所に来ているが、
 海水の道となっている海峡〔ジブラルタル海峡〕はアルケイデースが
 切り開いたと考えられていた。実際には地殻変動によって、一つの途
 切れない海岸であつた場所が二つに分かれたのだらう。裂け目のとこ
 ろに海が力を加えて道を作り、波がこちら側にアビラの山を引き寄
 せ、あちら側にカルベの岩山を押しやった。スペインとリビアを狭い
 海峡によって切り離すほど、長い年月の経過には大きな変化をもたら

す力がある！二十三 岸を離れてから四回太陽は東の空から昇り、〔そ
 の間〕舟は一度も港に（その必要がなかったので）寄港せず、すでに
 多くの水域を越えた。かの海峡にいまや入り、狭い開口部を抜ける
 と、無限に広がる大海へと漕ぎ出でる。陸に囲まれた海〔地中海〕で
 さえこれほど広いのなら、陸を取り囲んでいる海の広さは如何ほどで
 あるうか？二十四 波濤の彼方に肥沃なガーデの町と他の二つの町が
 姿を消す。あらゆる陸地と海岸が見えなくなり、空が海の、海が空の
 境界となる。その時ウバルドが言った、「婦人よ、あなたはわれわれ
 を果てのない海に導いてくださいますが、教えて下さい、ここに来た
 人が過去にいたかどうか、われわれが向かっている地域に人間が住ん
 でいるかどうか。」二十五 婦人が答える、「ヘーラクレスはリビア
 とスペインの諸地方で怪物たちを殺し、あなた方の海〔地中海〕の岸
 辺をすべて回って征服した後、大海にあえて挑むことをしませんでした。
 「人が越えてはならない」境界を定め、人間がきわめて狭い世界
 の中でしか知を探究できないようにしました。しかし、ヘーラクレー
 スの警告をオデュッセウスは遵守せず、「境界の外にある世界を」見
 て、知ろうとしたのです。」二十六 オデュッセウスは「ヘーラク
 レースがジブラルタル海峡に立てた二本の」柱を越え、大胆な飛翔を
 試みて開かれた海へと漕ぎ出でました。しかし優れた航海者であつた
 ことがかれにとっては災いしました、なぜなら貪食な海はかれを飲み
 込み、かれの体とともにその大いなる冒険も闇の中に放置され、あな
 た方の間でいまや語られていないからです。他にも風に押されてこの
 海にやってきた者がいたならば、戻らなかつたか、海で息絶えたかの
 いずれかでしょう。二十七 ですから、あなた方が渡っている大洋は

未知の海であり、幾多もの知られざる島々と国々を隠しているのです。人が住んでいない土地ばかりではなく、あなた方の地方のように肥沃な土地もあります。そうした地域では農業の条件が整い、太陽から吹き込まれた生命力も旺盛なのです」するとウバルドが再び言う、「教えてください、知られざる世界における法の掟がどのようなもので、宗教がどのようなものなのか。」二十八 婦人はかれに向かってさらに言った、「それぞれの地域がそれぞれの慣習や衣服や言葉をもっているのです。或る民は動物を、或る民は大いなる共通の母〔大地〕を、或る民は太陽と星々を崇めています。おぞましい〔人肉の〕料理を邪悪で残酷な食卓に並べる民もいます。カルベ〔ジブラルタル海峡〕からこちら〔西〕に住んでいる民は、要するにいずれも野蛮な風習をもち、神を敬わない者たちなのです。」二十九 「それでは」と騎士は婦人に向かって答えた、「書物〔聖書〕の記述を明らかにするために地に降り給うた神〔神の子キリスト〕は、世界のかくも広い部分を占めるこの地に、真理の光がまったく及ばないことを望み給うのですか?」「ちがいます」と婦人は答えた、「その逆です、ピエトロが説いた信仰はこの地にも伝えられ、文化的な風習も然りでしょう。長い道がこれらの民とあなた方の交流を妨げる状態は、いつまでも続かないでしょう。三十 ヘーラクレースの柱が冒険的な航海者たちの間で無意味な作り話となり、名前が付けられていない遠くの海や未だ知られていない国々があなた方に知られる時が来るでしょう。全ての船団の中で最も野心的な船が海によって囲まれた全地域を探索して周り、巨大な土の塊である陸地を計測し、それによって榮譽を得て、太陽の競争者となることでしょう。」^(七) 三十一 リグーリアの男〔コロンブ

ス〕が最初に大胆にも未知の航海に挑むでしょう。脅すように震える風も、人を寄せ付けない海も、予知できない天候も、手に負えないほど恐ろしいといま思われている他の危険や脅威も、勇敢な男の気高い心を——アビラの狭い境界の中〔地中海の中〕に——押さえ込むことはできないでしょう。三十二 コロンブスよ、あなたが幸いなる帆をかくも遠方の新しい空に向かって広げるので、千の眼と千の翼を持つ名声の女神はあなたの飛翔を眼で追うのに苦労するでしょう。名声にはアルケイデースとバツコス^(八)を（^(九)）称えさせればいいのであり、あなたのことは、後世の人々のために、少しでも語らせればそれで十分なのです、そのわずかの言及によって、あなたの事績は莊重な叙事詩や歴史のなかで長々と想起されるでしょうから。」^(一〇)

幸福の島

三十三 婦人はこのように言い、西へと波間の航路を定め、それから南へ舵を切る、前方に沈みゆく太陽を見て、後方で日が昇るのを見る。美しい暁が光と露を周囲にまき散らす頃、頂を雲に隠した山^(十一)が、遠くにうつすらとはあるが、一行の前に姿を現す。三十四 さらに先へと進んだ一行は、すべての雲が消散した時、その山が先端の尖ったピラミッドのごとく上に行くほど細くなり、中腹で膨れていることや、巨人エンケラドスの背中に乗っている火山〔エトナ山〕のごとく——この火山の特質は昼間に噴火し、夜には空を炎で赤く染めることである——煙を断続的に吐いていることに気づく。三十五 そして〔この山がある島と共に〕群島を成す島々と、この山ほど険しくも高くもない山々が兵士らの視界に入ってきたが、これらの島々は太古の時代にマカローン・ネーソイ〔幸福の島々〕と呼ばれた——そう呼ばれた

のは、その昔、天に愛でられていると考えられたからであり、そこでは耕作しなくともおのずと作物が実り、野生の葡萄の木が最上の葡萄をつけると信じられた——島々である。三十六 そこではオリブが花を咲かせないことも、樫の木の空洞から蜜が滴らないことも、甘い水を湛えて耳にやさしい音をたてる小川が山から流れ下りないことも、西風と露が夏の日差しを和らげるので酷暑もないと言われた。だから太古の人々は至福の野や幸いなる魂たちが集う有名な館をこの地に置いた。三十七 これらの島々に婦人は触れながら、「いまやあなた方の旅は終わりに近づきました」と兵士たちに言った。「あなた方が見ている幸福の島々について、あなた方は多くのことを耳にしています。そのすべてが明確というわけではないでしょう。確かにこれらの島々は土が肥えて、美しく、楽園的ですが、言われていることは真実ばかりではなく、虚偽も多く含まれています。」そう言いつつ、十島から成る群島の最初の島に舟を近づけた。三十八 その時カルロが言う、「婦人よ、もしわれわれが帯びている重要な任務がそれを容認するならば、私が島に上陸し、知られていない海岸を探索し、原住民やかれらの宗教儀式を観察し、知識欲の強い人が私を羨む全てのことを見ることを許可してください。私は人々に自分が見た新奇なことを語り、その時《私はそこにいた！》と言いたいのです。」三十九 婦人はかれに答えた、「そう願うあなたはまったく立派ですが、もし厳格で不可侵なる天の決定があなたの殊勝な願いを却下するならば、私に何ができませんか？ 神は〔地理上の〕大発見に人類が要する時間を定め給いましたが、その時間はまだ完全に経過していないのです、深い海域に関する本当の情報を、あなた方が自国に持ち帰ることは許さ

れないのです。四十 神はあなた方に恩寵を垂れ給い、航海技術や知識の欠如を不問に付して、あなた方がこの海を旅し、かの騎士の虜囚の地となっている島で舟を降り、かれを反対側の世界に戻す、そういう使命をあなた方に授け給うたのです。あなた方に許されているのはそれだけであり、それ以上のことを望むことは運命に逆らう僭越な行為なのです。〔二〕こう言って婦人が話し終えた時、最初の島はすでに下のほうにあり、二つ目の島が昇ってくるように思われた。四十一 婦人は舟を漕ぎつつ、幸福の島々が一列に並んで西へ伸びていることと、それぞれの島と島の間にある海の幅がほぼ同じであることを指摘した。〔十島のうちの〕七つの島に関しては原住民の家屋や耕作地や暮らしの様子が確認できる。三つの島は無人島で、山や森には獣たちが安全な巣を作っている。四十二 人が住んでいない島のひとつになり奥まった場所があり、そこに見いだされる弧を描く海岸は二つの幅広の先端を三日月形に外へ伸ばし、その間の部分に広い隠された湾を作っている、そこでは一枚の岩が棧橋^{さんばし}となっており、その岩は湾と向かい合い、その背後には沖から押し寄せる波が控えているが、波は岩によって押し戻され、打ち砕かれる。二つの大きな崖がこちら側とあちら側に塔のごとく聳え、船乗りたちはそれらを目印にして寄港している。四十三 島の低いところは穏やかで静かな海となっている。高いところには黒ずんだ森に遮られて外からの視界の及ばない一角があり、森の中には蔦や日陰や清流を伴った魅力的な洞穴がある。長旅から戻った船舶は、ここでは太綱で繋がれることも、鉤のついた錨で留められることもない。婦人はひっそりと静まりかえった浜に舟を漕ぎ入れ、広げていた帆を畳んだ。四十四 「見てください」とそれか

ら言った、「あの高い山の頂上にたっている立派な建物を。キリスト教信仰の英雄はあそこで飽食と安逸と戯れと無為のうちに怠けて暮らしているのです。(十二) あなた方は夜明けの光を頼りにして、あの高みに向かって斜面を登るのです。「太陽が高く昇るまで」待とうとはしないでください、朝の時間以外は、いかなる時間帯もこの山の登攀には適していませんので。四十五 まだ陽が残っていますので、山の麓まであなた方は「今日のうちに」行くことができます。」兵士たちは気品のある案内者に別れを告げ、待ち望んだ海岸に降り立つと、山に通じる道をいとも簡単に見つけたので、足に疲労を感じることなく歩いた。だが、かれらが山に着いたとき、太陽神の二輪車は海からまだ遠く離れていた。

島に聳える山

四十六 兵士たちは頂上——それは厳めしく、高いところに聳えている——に至るためには崖や絶壁を登る必要があること、頂上に通じる道の道も雪や氷で覆われていること、頂上には草原と花畑が広がっていることを見て取る。まるで白い顎髭に接して緑の頭髮が葉をつけるかのようで、氷に表面が包まれた山肌でも百合や薔薇が可憐な花を咲かせている、魔術はかくも自然から乖離した現象を生むことができる。四十七 二人の兵士は山麓の静かな野で木陰に入って夜を明かす。黄金の光の尽きない源泉である太陽が空に最初の光線を射し込むや否や、両者は「上へ、上へ」と叫び、燃えるような意気込みをもって旅を再開した。だが、その出どころは分からないが、地面を這う奇怪で凶暴な怪物がかれらの行く手を阻む。四十八 鱗で覆われた青みがかった金色の鶏冠を逆立て、首を怒りで膨らまし、目をぎらぎらと輝かせ、

腹で道全体を覆い隠し、毒と煙を口から吐く。とぐろを巻くかと思えば、こぶだらけの渦巻きを解き、体の前と後ろを交互にくねらせて進む。このようにして怪物は警備の役を担っているのだが、兵士たちの歩みを遅らせることはできない。四十九 すでにカルロは剣を握り、蛇を襲おうとしている、だがもう一人がかれに向かつて叫ぶ、「何をしている？何を試みようというのか？腕力でもって、そのような武器でもって、この場所を守る蛇に勝てると思うのか？」ウバルドが不滅の黄金の鞭(十三)を振ると、それがシュツと音を立てるのを聞いて怪物は恐れをなし、急いでその場から逃げて道をあげ、姿を隠した。五十 少し上に登ると、唸り声をあげ、恐ろしい目をした凶暴な獅子がかれらの歩みを遮る、たてがみを立て、胃袋が見えるほど口を大きく開いている。尻尾で体を打ち、怒りを募らせている、だが兵士が鞭を差し出して獅子に見せると、獅子の心臓に生じた不可思議な恐れがその怒気や生来の高慢さを凍てつかせ、獅子を立ち去らせる。五十一 二人は速い足取りで登山を続けるが、すでにかれらの前には戦いに長けた恐るべき獣の軍勢がいる、獣たちは唸り声も、動きも、外見もさまざまである。ナイル河とアトラス山脈の間に広がる地域を放浪する奇怪で、恐ろしい獣、ヘルシーニアやヒュルカーニアの森に潜む獣、それら全てがここに集まっているかのようである。五十二 だが、大群を成す凶暴な軍団は兵士たちを追い払ったり、かれらを襲ったりするどころか、小さな音を聞いただけで、そして鞭をちよっと見ただけで、(驚くべきことに)逃避に転じる。獣たちに勝利した二人はいまや何にも妨害されず——道が險しく凍っているので速く進むことはできないが——登頂を達成する。

悦楽の園

五十三 かれらは雪道を踏破し、岩だらけの急斜面を登ってきたのだが、山頂では美しく晴れ渡った適温の夏空と、広々とした開放的な平地を見いだした。爽やかで芳気を漂わせた風がそこでは常に吹き、その強さや間隔は変化することなく、空を巡る太陽も——他の場所ではそうした操作を頻繁にするのだが——風の勢いを減じたり増したりすることがない。五十四 この場所では寒さと暑さが、曇り空と晴れた空とが——他の場所では起きるように——交互にもたらされず、太陽は純白の輝きでいつも空を飾り、季節の変化を生じさせず、野には草を、草には花を、花には香りを、木々には常に木陰を伴わせる。豪華で美しい宮殿が、周囲の山や海を見渡すように、湖畔に建っている。(十四) 五十五 兵士たちは高地の荒れた斜面を登ったのです。疲れ、体力を消耗していた、そのため花畑の中の道をゆつくりと進み、ときおり歩みを止めた、そんなかれらの前に、見よ、噴水が現れる、それは渴いた喉を水で潤すように誘うかのようであり、水は噴水の高いところにある岩盤から下へ落ちていくが、もとは豊かな水源から流れ出たものであり、幾多もの水しぶきが水滴を草に吹きかけている。五十六 だが、水はその後ひとつに集まって、草の生えた岸の間を流れる深い水路に入り、常緑樹の木陰の下でさらさらと音をたてる流れとなる。冷たく薄闇に包まれた流れであるが、あまりにも透き通っている、美しい深い川底がくまなく見える。岸辺の草は高く伸びているので、柔らかく涼しげな座席のようになっていく。五十七 「見よ、笑いの噴水だ、(十五) 見よ、人を殺める力を秘めた小川だ。いいか、ここでは「水を飲みたい」と願ってはならぬぞ、よく注意せねば

ならぬぞ。快樂へと誘う邪なセイレーンたちの甘く妖しげな歌声に聞き入ってはならぬぞ、美しい流れの川幅が広がり、湖になっているところまで、こうやって耳を手で塞いで進んでいこう。」五十八 ここでは岸辺に食卓が置かれ、珍しく美味な食べ物と並べられ、澄んだ水の中を騒がしく淫らな二人の娘がじゃれ合いながら動いている、互いの顔を水をかけ合ったり、定められた地点までどちらが先に泳ぎ着くか競争したりしている。ときには水の中に飛び込み、潜り、それから頭と背中を水面に出している。五十九 二人の兵士たちは裸の美しい女泳者たちに少し心を動かされ、立ち止まって、かのじよらを見つめた。娘たちは「見られているとは知らず」まだ競争や戯れを続けていた。そのうちに一人が「水の中で」体を起こし、乳房や見る者を楽しませるすべての部分を見せ、何も付けていない胸から上を天に晒したが、他の部分は川の水が美しいベールとなっていた。(十六) 六十 波間から明けの明星が濡れたままの姿で水を滴らせながら出てくるように、あるいは愛の女神が生まれるときに海の多産な泡の中から外に出てきたように、そのように娘は川から出て、その黄金の髪からは透明の水が滴り落ちていた。それから周囲を見渡し、二人の兵士がいることに気づいた仕草を一瞬すると、体を曲げて縮こまった。六十一 そして頭のでっぺんで一つに結び目にして髪を即座に解き、下に垂れた非常に長い金髪の手で柔らかな真珠のような肌を覆った。おお、何と甘美な見世物が兵士たちから奪われたことか！だがそれを視界から奪ったもの「金髪」もそれに劣らず美しい。こうして身体を水と髪によって隠した娘は笑みを浮かべ、恥ずかしげに兵士たちの方を向いた。六十二 微笑むと同時に顔を赤らめたが、その赤らみの中で弾けた笑

みは比類がないほど美しく、はにかんだ優美な顔は赤らみで顎まで染まった。そしていかにも優しく、軽やかな声で兵士たちに話しかけたが、他の男であればその声を聞いたら誰でも恋心を抱くであろう。「おお、幸運なる旅人よ、この素晴らしく、幸いなる場所によくぞお越しになりました！六十三 この港は世から逃れてきた人々を迎えます。ここでは世の苦しみから逃れることができます。黄金時代に何の制約もなく奔放に生きた古代人が味わった、かの喜びを感じることができません。ここに至るまであなた方が必要とした武器は、もう安心して置いて、この木陰の静寂に供えてください、あなた方はここで愛神の戦士となれば只それだけでいいのであり、六十四 臥所と草原の柔らかな草があなた方の甘い戦いの場となるのですから。幸いなる男たちを自らの僕とされるお方〔アルミード〕のもとに、あなた方を私たちがお連れしましょう、そのお方はご自身の寵愛を受けることのできる選ばれた少数の男たちの中にあなた方を入れてくださるでしょう。でもその前に、この川の水で体の汚れを落として、あの食卓にある食べ物を食べてください。」六十五 一人がこう言うと、その言葉に合わせてもう一人の娘も態度と視線で兵士たちを招いたが、それはまるで弦楽器の音に合わせてステップを速く踏んだり遅く踏んだりする人〔舞踏家〕のようである。しかし兵士たちはこうした不実で悪意のある誘惑に対しては用心し取り合わないで、甘く挑発的な表情や言葉は外で空回りして「かれらの魂に響かず」、かれらの感覚を刺激するだけである。六十六 そうした甘い幻想の一部が「感覚を介して魂の中に」浸透して欲望を芽生えさせるならば、武器に身を包んだ理性が直ちに介入して湧き上がった欲情を根絶する。娘たちの二人組は失望して〔誘

惑を〕断念し、兵士の二人組は別れの言葉も残さずに立ち去る。兵士たちは建物の中に入り、娘たちは拒絶されたことに大きな衝撃を受けて水の中に飛び込む。

第十六歌

宮殿に入る二兵士

一 壮麗な宮殿は円形で、外周のほぼ中央に位置する奥まったところに庭園を配しているが、庭園の比類なき美しさたるや、過去のいかなる名園をもっても及ばない。造園を手がけた悪魔たちが見通しのきかない入り組んだ回廊を周囲に張り巡らせ、その一帯を欺瞞に満ちた迷路としたので、曲がりくねった道で囲まれた庭園に外来者が入り込むことはできない。二 二人の兵士たちは（この広大な宮殿には多数の門があるのだが）最も大きな門の敷居を跨いだ。輝く黄金の蝶番に取り付けられた両の扉が軋みを上げ、その表面には銀づくりの浮き彫りが施されている。かれらは浮き彫りを一心に見つめたが、その出来映えは素材の価値を貶めるほど見事である。そこに言葉はないが、彫像に生命を与えるために言葉は要らない、「彫像に生命が宿っていると錯覚する」眼を信じる者は、彫像に言葉の存在を認める。三 片方の扉には、マイオニア人の侍女たちに囲まれて羊毛を紡ぎながら物語を朗唱する英雄アルケイデースが描かれている。（十七）地獄を征服し、星々〔天空〕を支えたこの強者がいまや糸を紡いでいる様子を、愛神が見て、微笑んでいる。虚弱な右手で英雄の必殺の武器を戯れに握っているイオレーの姿もある、（十八）かのじよが羽織っている獅子の皮は柔らかな体を包むにはあまりにも粗いように思われる。四 もう一つ

の扉に描かれた海は、白い波間で泡立つ水色の大海原のようだ。中央には武装した船団が二列に並び、武器は閃光を発している。海面は黄金色に染まり、レウカーテ島は全体が戦の炎で燃えているようである。一方の側にはローマの軍勢を率いたアウグストゥスが描かれ、もう一方の側には東方世界からエジプト人やアラブ人やインド人の軍団を連れてきたアントーニウスがいる。(十九)

五 キュクラデス諸島の島々が隆起して泳ぎだし、高い山々がぶつかり合っていると、浮き彫りを見る者は言うだろう。そそり立つ塔のごとき両船団の衝突場面は、鑑賞者にそう言わしめるほど迫力がある。火のついた矢がすでに放たれ、海は不気味な殺戮が繰り返されるおぞましい場とすでに化している。見よ、(戦いがまだ決着していないのに) 異邦人である女王(クレオパトラ)が、見よ、逃げようとしている。六 そしてアントーニウスも逃げている、かれは世界の支配権を得ようとしていたというのに、その野望を投げ捨てることも厭わない。否、逃げてはいない、この勇敢な男は怖れてなどいない、怖れるような男ではない、おのれを道連れにしようとする女王に連れ添おうとしているのだ。見るがよい、一時にして愛と恥と怒りにわななく男のごとく、結末の見えない激しい海戦と、遠ざかる「女王が乗った」船の帆を、かれが交互に見ているのを。七 ナイル川の入り江に投錨したかれは、女王の膝にかかえられて死を待っているようだ、女王の優美な顔を前にした喜びに浸り、おのれの過酷な運命を慰めているようだ。このような場面が宮殿の扉には銀地の浮き彫りで表現されていた。二人の兵士たちは見とれていた彫像から目を離し、迷路となっている宮殿の一角に入った。八 蛇行して、川筋も曖昧なメアンドロ川(二十)が気まぐれに、定めなく漂う

水を伴って下へ上へと動き回り、そのため海に向かう流れと源流に向かう流れが生じ、下っていた水が上ってきた水とぶつかって混ざり合うように、迷路の中の道は複雑に絡み合い、その連れ具合たるやメアンドロ川の水以上なのだが、(魔術師から手渡された)書物(二十一)はそれらの道を表示し、解説しているので、兵士たちは難渋することなく進路を見いだす。

アルミீダの園

九 迷路から抜け出たかれらは、楽園のごとき美しい庭園のところに来た。そこには水の澱み、澄んだ水の流れ、多種多様な花や植物、さまざまな草花、陽光を浴びた丘、日陰をつくっている谷があり、木立や洞窟も全景の一部を成しているが、庭園を美しく心地よい場所にして、あらゆるものを作り出している技(アルミீダ)の形跡は、何一つとして認めることができない。十 (人工のものと自然のものが完全に混ざり合っていると)風景の飾りとなっていてるものや、風景の舞台となっている土地が、すべて自然から生じていると人は考える。技が自然の産物であるかのように、自然がみずからの模倣者である技を戯れに模倣しているように、人の目には映る。ところが微風は——ほかのものもそうなのだが——魔女の仕業によって生じているのであり、その微風が木々に花を付けさせている。花が永遠に萎れないので果実は永遠に絶えることがなく、ひとつが成長すると、別のひとつが熟す。十一 膨らみはじめた無花果(いちじく)の上で、幹を同じくして、同じ葉の間で実った別の無花果が傷みはじめる。金色に輝く成熟した林檎と緑色の林檎が一本の枝から垂れ下がる。農園の日当たりのよい場所では、繁茂する葡萄の木が棚の上の方まで蔓を張り、実をつける。

花を付けたこちらの蔓の葡萄はまだ若い、こちらの蔓は黄金色の葡萄や石榴石のように赤い葡萄を実らせていて、それらは果汁を大量に含んでいる。十二 緑なす枝葉の間では可愛らしい鳥たちが競って愛の調べを奏でる。風がざわめき、木々の葉や水面をさまざまな強さで揺らし、それらに音を立てさせる。鳥たちが囁りをやめると、風は強く吹いてそれに応え、鳥たちが囁っているときは優しく吹く。偶然によるものか、意図してか、音楽的な風は鳥たちの歌声に或るときは和し、或るときは取って代わる。十三 多様な色模様の羽と深紅の嘴をもった一羽（の鸚鵡）が他の鳥たちの間を飛び回り、舌をあらゆる方向に素早く動かして、人間の言葉に似た声を発する。きわめて巧みにその場所ではし語り続け、それは驚くべき奇跡の業であつた。周りの鳥たちもその声に聞き入り、大気を震わせていた風も止んだ。十四 「さあ、ご覧なさい」、鸚鵡は歌った、「恥じらいながら汚れなき薔薇が緑の夢から咲き始めるのを、まだ半分しか花が開いていなくとも、隠された部分が多ければ多いほど美しい薔薇を。でも、やがて大胆になつて、胸〔花冠〕を隠すことなく曝け出します。そして萎れて、少し前まで多くの娘たちや恋する人々を魅了した、あの薔薇と同じとは思われません。十五 同じように人の一生における華やかな青春期も、一日が過ぎゆくうちに色褪せてしまいます。人の一生は、いくら季節の春が再び巡り来るからと言っても、華やかな時期を二度迎えることも、青春期を取り戻すこともできないのです。さあ、薔薇の花を摘みましよう、今の輝かしい朝のうちに、輝きはすぐに失われてしまうのですから。愛の薔薇を摘みましよう、愛することであざれることができる今のうちに。」十六 鸚鵡が黙すると、鳥たちの合唱団が声を和し、

鸚鵡に賛同するかのごとく、再び囁り始める。鳩たちは以前にも増して接吻し、それぞれの動物たちも再び愛に満ち満ちる。堅いオークの木や清純な月桂樹も、葉に覆われたあらゆる種の樹木も、大地や水も、愛を感じて甘い溜息をついているかのよう。（二十二）

魔女と戯れるリナルド

十七 かくも軽やかな調べが流れ、怪しいまでに美しい楽園の中を二人の兵士は歩を進める、思慮深く慎重な行動に徹して、悦楽に誘い込まれないよう気を引き締めつつ。そして前方の茂みの間に視線を向けると、見える、もしくは見えるように思われ、見えると確信するに至る、恋に溺れた男と、その求愛を受けた女がそこにいて、男は女の膝の上に、女は芝生の上に横たわっているのが。十八 女は身につけているベールを胸元で開き、乱れた髪を夏の風に靡かせている。物憂げな表情を装い、火照った顔が美しい汗の滴りによつて白みを帯びている。艶やかな微笑みが女の濡れた両の眼の中で、波に反射する光のごとく揺れ輝く。女は男の上に覆い被さり、男のほうは頭部を女の柔らかな懷に据え、顔を女の顔の方に持ち上げている。十九 恋い焦がれた男は熱い視線を女に注ぎ、憔悴して、やつれきっている。女は体を曲げ、甘い接吻をあるときは男と目を合わせつつ何度も味わい、あるときは男の唇から吸い上げる、そのとき男が息を大きく吐くのを聞いた者は、こう思うだろう、「いま男の魂が束縛から解放放たれて、女の体内に入り込んだ」。二人の兵士たちは茂みに隠れて、戯れる男女から目を離さない。二十 男の傍らに、光り輝く曇りのない鏡（兵士には似つかわしくない物）が掛けられていた。女は起き上がり、愛の儀式で用いられるその鏡を男に握らせ、擡げさせた。女は喜ばしい目

をして、男は燃えるような目をして、異なったものを介して一つのも
のを凝視する。女は鏡をおのれの顔を映す道具に、男は女の澄んだ両
の瞳をおのれを映す道具とする。二十一 男は隷属の身にあることを、
女は男を隷属させていることに満足し、女は自らを見つめることに誇
りを感じ、男は女を見つめることに誇りを感じる。「向け給え」と言っ
て騎士は女に請うていた「さあ向け給え、私にあなたの両の眼を、「あ
なたを」喜ばせ、「あなたを見つめる者を」幸せにするその眼を、な
ぜなら私から吹き出ている炎は、あなたはお気づきでないでしょうが、
あなたの美貌の本当の証明なのです。私の心臓は鏡よりも余すと
ころなく、その美貌の驚くべき形象を示しています。二十二 嗚呼、
あなたが私を蔑まれるならば、せめてあなたがご自分の美しい顔を凝
視してください。あなたの目は他の物を見ても満足を感じず、ご自身
を見てはじめて歓喜するでしょうから。鏡はかくも甘美な像を捉える
ことができません、天上的な美を小さな硝子の中に詰め込むことはで
きないのです。天空こそはあなたに相応しい鏡であり、星々のうちに
あなたはご自身の美しい表情を認めることができるのです。」二十三
アルミードは男の言葉を聞いて微笑むが、鏡に映った自分から視線を
逸すことなく化粧を続ける。髪を編んで、艶めかしく乱れていた髪を
きれいに整えると、細い髪の毛をカールして、その上に——金色の面
に顔料を振りかけるように——花をまき散らせた。美しい胸元からの
ぞくぞくのごとく白い肌には、百合とは対照的な色の薔薇を添え、ペー
ルの乱れを直した。二十四 誇り高く、優美な孔雀くじゃくさえも、目のごと
き模様が入った見事な尾羽根を広げて見せないし、美しさにかけては
孔雀に劣らない虹にじの女神も、水気を帯びたおのれの腹部の曲線を太陽

の光でかくも燦然さんぜんと輝かせたり、深紅に染めたりしない。だが、アル
ミードの装飾品の中でもひととき素晴らしいものは帯であり、たと
え裸になっても帯は体から離さない。実体のないものに実体を与え
てアルミードは帯を創り出し、製作に際してはさまざまな成分を誰
にも分らない方法で混ぜ合わせた。二十五 軽い侮蔑、穏やかで
静かな拒絶、親しげな戯れ、喜ばしい和解、笑みを浮かべて発せら
れた言葉、甘美な涙の粒、喉につかえた溜息、柔らかな口づけ、こ
うした成分をアルミードはすべて融合し、次に一つにして、弱い炎
で時間をかけて鍛え、驚くべき帯にすると、それを自らの美しい腰
に巻いた。二十六 ついに化粧をやめ、暇を乞うて、男に接吻すると、
その場から立ち去る。昼間庭園の外に出て、仕事をしたり魔術の技を
磨いたりするのがアルミードの日課なのだ。男は庭園に残る、という
のも庭園の外に出て、気晴らしをすることが、男には一瞬たりとも
許されていないからであり、アルミードと一緒にいない時、恋の虜
となった男は動物たちや植物に囲まれて、園の中を一人でうろつい
ている。二十七 しかし親しき静寂を伴った闇に乗じて、人目をは
ばかる恋人たちが密かに逢う時刻になると、この庭園の中にいる男
女も同じ屋根の下で至福の夜の時間を過ごす。だが、アルミードが「魔
女の」掟で定められた勤めのために愛の床を離れ、庭園の外に出た
とき、茂みの中に隠れていた二人の兵士は甲冑に身を包んだ華麗な
装いで男の前に現れ出た。

我に返る英雄

二十八 戦で勝ち誇ったまま更なる手柄を立てる機会を奪われた軍
馬は、安逸に暮らす種馬となって家畜の群れる牧場を自由に駆けて

いても、ラッパの音や武器の輝きを感じすると嘶き、音や光が発せられた方向へ向かって駆け出し、たちまちいきり立つて、騎士を背中に乗せて、おのを攻め立てた敵の馬に突進して反撃しようとするが、

二十九 兵士たちの武器の輝きに突然目を打たれた若武者は、まさにその軍馬とそっくりの動きをした。好戦的で、勇猛な男の魂は——ふわふわとした力のない安楽と心地よい微睡みと酩酊の中でそれは無力化していたのであるが——兵士たちの武器の輝きに激しく動揺した。それを見たウバルドは男の前へと進み出て、ピカピカと光るダイヤモンドの盾を男に向けた。**三十** 男は輝かしい盾に視線を向け、そこに映った自らの姿を見て、いかなる状態におのれがあり、いかに華美な飾りを付けているかを悟る。芳香を放つ髪、扇情的な外套、そして身につけている物の中でもとりわけ腰に下げている剣に見入るが、その剣は豪華な装飾によって威厳を失っている。その飾り付けにより、役に立たない装飾具と化したようで、過酷な戦いで用いられる武器とは思われない。**三十一** 深く眠り込んでいた人が長らく朦朧とした状態にあった後に目覚めるように、男は盾に映った自らの姿を見つめるうちに正気を取り戻したが、おのれの姿はとも見るに耐えず、視線を落とす。うつむいている間に、恥じ入る気持ちが強くなり、弱気になり、内にこもる。自らを閉ざして、海の底にでも、火の中にでも、地下にでも隠れたい。 **三十二** そのときウバルドが話し始める、「すべてのアジアの民が、すべてのヨーロッパの民が戦地に赴いている。榮譽を求め、キリストを崇める者は従軍し、いまシリアの地で戦っている。お主だけだ、おおベルトルドの息子よ、世の人々から離れて、地上の片隅に引きこもって安穩としているのは。お主だけだ、世

をあげての長征に加わっていないのは、小娘に目がくらんだ洒落男よ。

三十三 いかなる眠りに襲われて、いかなる気怠さを感じて、お主はかくも戦意を失ってしまったのか。いかなる卑劣な罠がお主を惑わしたのか。さあ、起き上がるのだ、軍勢が、ゴッフレードが、お主を呼んでいる、運命と勝利の女神がお主を待っている。来るのだ、おお宿命に支配された戦士よ、幸先よく開始された戦役を完遂へと導くのだ、お主がすでに打撃を与えた異教の民を、神慮が宿ったお主の剣で殲滅するのだ。」 **三十四** ウバルドが黙ると、高貴な少年は頭が混乱して、しばし動くことも言葉を発することもできなかった。しかし、恥に代わって怒りの感情——怒りは理性を警護する勇猛な兵士である——が湧き上がり、赤らんでいた顔が火照りはじめ、新たな紅がどんどん拡がり熱気を帯びてくると、卑屈な隷属の象徴であった女々しい飾りを取り外し、騎士に相応しくない衣装を脱ぎ捨てた。 **三十五** そして急いでその場を去り、入り組んだ道を通って迷路から抜け出た。その頃アルミーダは宮殿の門を守備する衛兵が倒れているのに気づいた。おのれの愛人の男が逃亡しようとしているのではないかと最初は思ったが、その疑念は次に確信となった。そして男が愛の園から慌ただしく出て行くのを（嗚呼、哀れ哉！）目撃した。

アルミーダの絶望

三十六 「どこに行くの、残酷な人よ、私を残して？」、そう叫ぼうとしたが、苦しみのあまり声にならず、そのため涙で濡れた言葉は後戻りして、より大きな苦悩に包まれて心臓の中で炸裂した。憐れな女よ！おのれの技を凌ぐ力と技に、この女は愉悅の種を奪われたのだ。女はそれを悟りつつも、男を引き留めようとして尚も魔術を用いるが、虚

しい試みに終わる。三十七 テッサリアから来た魔女は汚れた口で、さわめて多くの瀆神の言葉^{まじな}を吐き、また諳^{そと}んじてしていた、星々の動きを止め、地下の刑場から亡霊たちを引き出すあらゆる呪文を。おのれの呼びかけに、せめて悪魔たちが応えることを期待したのであったが、この試みも功を奏しない。魔術に頼ることはやめ、愛らしく懇願することでおのれの美貌をいっそう際立たせ、それによつて魔術を凌ぐ結果を得ようとする。三十八 アルミードは駆ける、おのれの尊厳を投げ捨て、なりふり構わずに。嗚呼、今やどこに消えてしまったのか、「男たちに対する」かのじよの勝利と誇りは？かのじよはこれまで愛の王国を——それがいかに大きくとも——首を縦や横に振るだけで転換させ、変転させ、自惚^{うぬぼ}れと憤怒とを併せ持ち、男に愛されることを好むと同時に自分を愛する男を侮蔑し、自分に対してのみ歓喜し、自分を見ること以外には、自分の美しい眼の力を男のうちに認めることしか楽しみを持たなかったというのに。三十九 今や置き去りにされて、侮蔑されたアルミードは、自分から離れていき、自分を見下す男をひたすら追いかけて、男に拒絶された自らの美しい素顔を涙で飾ろうとする。女は進む、か弱い足で凍てついた厳しい山道を踏みつけながら。大声を発して自らの使者として前方に送り出すが、男が海岸に到着するより前に、声は男のもとに届かない。四十 正気を失ったように、こう叫んでいた。「わたしの一部だけを引き連れて、残りの一部を放置して行く方よ、どちらか一つを取って、もう一つを返すか、さもなければ両方に死を与えて（！）、待って（！）、歩みを止めて（！）、わたしの最後の言葉があなたに届くまでの間だけでも。口づけをわたしは欲しないわ、わたしより立派な女があなたの口づけを

受けるでしょうから。怖れているの（？）、立ち止まることを、残酷な人よ、わたしの願いを断ることだってできるのよ、わたしから逃げることもだってできたのですから。」四十一 するとウバルドが男に言った、「お主よ、あの女を待たないという手はないですぜ、美しい顔で懇願しながらこちらにやってきます、眼を毒々しい涙で愛らしく濡らせて。セイレーンの誘惑をお主が目と耳で受け止めて、それを手懐けることを常とするならば、お主より自分は強いと言つてのける人はいませんぜ。そうやって理性は平和のうちに感覚を支配し、自らを磨くのですから。」四十二 この忠告に騎士は応じて歩みを止めた、そして女は目に涙を溜めて、息を切らして男たちに追いついた。その痛々しい様相たるや、これ以上の悲壮な姿はないという程であったが、悲壮さに凌ぐとも劣らない美しさもそれは含んでいた。男を見て、凝視したが、言葉は発しない、怒りのゆえになのか、なにかを思うからか、勇気がないからか、判じがたい。男は女のほうを見ようとしな。見たとしてもすぐに視線をそらし、恥じながら、恐る恐る見る。四十三 熟練した歌い手が澄んだ声を楽曲に合わせて大音量で発する前に、聞き手の注意を引くために優しく低音で声を震わせるように、苦しみ嘆きつつも策略と詐欺を企てる女は、おのれの声を刻印しようとする相手の魂を覚醒させるために、抑揚をつけてまずは短く溜息をつく。四十四 そして話し始めた、「自分の愛人に請う人のように、わたしがあなたに懇願するとは、非情な方よ、思わないでください。わたしたちは以前、愛人の関係にありました。あなたが今わたしの恋愛関係を否定し、そのような関係にあった時の記憶を苦々しく思っているのなら、わたしの敵としてせめて聞いてください。人は敵の願いをと

きに受け入れないといけないのですから。わたしがあなたに求めるのはただそれだけで、あなたは——わたしの要求に応じたとしても——憎悪を抱き続けてもよいのです。四十五 もしわたしを憎み、憎むことに喜びを少しでも感じるなら、その喜びを奪うような真似をわたしはしません。喜びにずっと浸っていてください。正しいと思うことは、やっていいのです。わたしもキリスト教徒を以前は憎み、あなた自身を——これは本当のことです——憎んでいました。わたしは異教徒として生まれ、あなたの方の軍の勢力をわたしの力で弱めようとして、さまざまな手段に訴えました。あなたを追い回し、捕え、戦場から遠く離れた知られざる神秘の地に連れてきました。四十六 その罪に加えてください、あなたがもつとも大きな屈辱であり被害であると思っているわたしの過ちを、あなたを誘惑して、愛の行為に導いて、楽しませたというわたしの罪を。確かにわたしは不実にも媚^こを売り、邪悪にも欺瞞を働いて、わたし自身の肉体の華を売り物として、その美に魅せられた人を恋に狂わせて、これまで大勢の男たちが「奉仕をしても」代償として得られなかった美を、新しい愛人「であるあなた」には貢ぎ物として捧げました。四十七 この誘惑がわたしの罰当たりな罪の一つとなりますように、わたしが犯した多くの罪を理由に、あなたがこの場所から立ち去り、あなたのためにつくられた宮殿——そこはこれまであなたにとって喜ばしい場所でした——を打ち捨てますように。出発するのです、海を渡り、戦い、奮闘し、わたしたちの信仰（イスラム教）に打撃を与えるのです。わたしもあなたに力を貸しましょう。何故にわたしがそう言うか、合点がいかないようですね。（イスラム教は）もうわたしの信仰ではなくなったのです！わたしが忠誠を誓う

のはあなたにだけなのです、愛しい残酷な方よ。四十八 あなたにわたしが添い従うことをどうか認めてください、わたしたちは敵となりましたが、この小さな願いをどうか受け入れてください。略奪者は捕虜を残して去りません。勝利者として、捕虜を従えて進みます。（キリスト教軍の）軍勢がこのわたしをあなたの数々の戦利品のうちに見いだして、指さしながら、あれが騙^{だま}そうとして騙された女だと言って、あなたに対する多くの賞賛にさらなる花を添えますように。四十九 卑しい召使いとなった今、この髪をのばしておく必要があります。うか、あなたもわたしの髪に興味はないでしょうか。切りましょう、女奴隷に相応^{ふさわ}しい髪型にしましょう。あなたの従者となり、戦いが激しさを増したときには、わたしが敵の軍勢の中に飛び込みましょう。わたしにも勇氣はあります、あなたの馬を世話して、盾を運ぶのに十分な気力も持っています。五十 盾持ちにでも、盾そのものにもでも、あなたの望みのままになりましょう、あなたの命を救うためならば、わたしは自分の命を惜しみません。敵の武器はあなたを傷つける前に、このわたしの胸を、このわたしの防具で守られていない首を貫通するのです。いかに冷血な荒くれでも、わたしを傷つけまいとして、あなたを傷つけようとししないでしよう、その「わたしに妨害された」ことに対する復讐の望みを、あなたに否定されたわたしの美貌——それがどれほどのものであるにせよ——に免じて捨てて。五十一 わたしはなんと惨めな女なの！まだ自分にできると思っているの？ 貶められ、もう誰も魅了しなくなった容姿を誇ろうとしているの？」さらに言葉を続けようとしたが、高山の岩からほとばしり出るような涙に声が遮られた。そのため、哀願しながら男の右手を、あるいは衣服の裾

をつかもうとする、男は歩みを止め、思い悩んだ末、苦悩を克服する。愛は男の体内に入る進入路を、涙は男の目から出る道筋を見いだせない。**五十二** 愛は男の心に入ろうとするが、心が理性によって凍結されたので、以前の恋の炎を再燃させようにもできない。愛の慎ましい仲間である憐憫が愛に代わって男の身体に入り込み、男が涙を堪えきれなくなるほど心を揺さぶる。男はそれでもみずからの内に柔らかな憐憫の情を押し込め、できる限り態度に示さず、平静を装う。**五十三** そして女に向かって言う、「アルミードよ、あなたに哀れみを感じます。もしわたしに、あなたの魂を悪しき恋の炎から解き放してあげることができるなら、そうしてあげたいと思います。わたしは憎んではないません、怒ってもいません、復讐をしようとも思いません、侮辱を受けたことを恨んでもいません。あなたは召使いではなく、敵でもありません。確かにあなたは過ちを犯しました、男たちに愛欲や怒りを募らせて。**五十四** しかし、それが何だと言うのですか？あなたが犯した罪は、万人が日常的に犯すものです。あなたの祖国における「イスラムの」掟や、あなたが女性であり、年が若いことも影響したのでしょう。わたしにも悪かったところはあります。わたしはみずからを哀れみずして、あなたを責めはしません。あなたはわたしの記憶の中で、欲びにつけ苦しみにつけ、親愛なる大切な人として甦るでしょう、わたしはアジアにおける戦役や名誉や信仰に影響がない限り、あなたを守る騎士であり続けましょう。**五十五** 嗚呼、わたしたちの罪深き行いに今ここで終止符が打たれ、わたしとの戯れがあなたに後悔を促し、その記憶がひとけのないこの世界の果ての地に葬られますように。ヨーロッパと、それに隣接する二つの地域において、わたしが成した

偉業が語られても、この行為だけは語られせんように。嗚呼、恥ずべき不名誉があなたの美貌や尊厳や王家の血統を汚すことがありますように。**五十六** あなたはここで平和に暮らしてください。わたしは行きます。わたしとともに来ることは、わたしを導き給う方のご意志に反します。ここに残るのです、さなければ「わたしの従者になるうという」望みは捨てて、賢い女となって別の幸せな道を歩むのです。」騎士がこのように語る間、女は動揺して取り乱し、わなわなと体を震わせる。けわしい表情でしばらく男を見つめ、ついに激して罵りの言葉を吐く。**五十七** 「あなたはソフィアの子ではない、アツィオの血を引いて生まれたのではない。^(三十三) 荒れ狂う海の波と凍てついたコーカサスの山から生を受け、ヒュルカーニアの雌虎から乳を与えられた。わたしはこれ以上、何を取り繕う必要がありますか？この残酷な男は人間的な感情をひとかけらも備えていない。わたしの苦悩を聞いて、顔色を変えたでしょうか？涙を少しでも流したり、溜息を一度でも吐いたりしたでしょうか？**五十八** 「この人が言ったことのうちの」どれをわたしが無視して、どれを受け入れるか、申しましようか？「この人は」わたしのためにみずからを捧げると言いながら、わたしから離れ、わたしを捨てようとしています。慈悲深い勝利者のように、邪悪な敵から受けた侮辱を忘れ、その過失を赦そうとします。聞いてください、この男がどのように説教を垂れるか！慎み深いクセノクラテース^(二十四) が愛について如何に論じているか！お天よ、お神々よ、このように邪悪な者たち「キリスト教徒たち」があなた方の塔やモスクを破壊するのを、どうして容認されるのですか？**五十九** さあ、行くがよい、残酷な者よ、わたしに残そうとしているかの平和

を〔あなた自身〕携えて。すぐに去るのです、邪悪な者よ。あなたは肉体から離れて霊となったわたしを、つきまとう影となったわたしを自分の背後に感じ、追ひ払うことができないでしょう。新しい復讐の女となったわたしは、蛇を頭に巻き付け、松明を手にして、あなたにかつて捧げた愛に勝るとも劣らない執念を持って、あなたを悩ませましょう。もしあなたが、運命の計らいによつて岩礁や大波を避けて無事に船旅を終え、戦地に返ることができれば、六十 流血と死体で埋め尽くされた戦地で自分も傷ついて倒れたときに、わたしを苦しめたことに對する報いを受けるがよい、非情な戦士よ。死に際に喘ぎながら、アルミードの名を繰り返し呼ぶがよい、それをわたしは聞きたい。」このとき女は苦しみのあまり意識を失い、最後に言おうとしたことも完全な言葉にはならなかった。死に襲われたように倒れ、冷たい汗をかき、目を開かなかった。六十一 アルミードよ、きみは目を閉じてしまった。天は無慈悲にもきみの苦しみを和らげようとはされ給わなかった。目を開けよ、哀れなきみよ、きみが憎む人となった男が悲嘆の涙をいまや浮かべているのを、きみは見ないのか？ 嗚呼、きみの耳に届くならば、嗚呼、どれほどきみを喜ばすことだろうか、男が発する嘆きの声が！（きみは信じないだろうか）男は悲しみに暮れて、最後の離別の言葉を、能う限りの声を振り絞つて述べている。六十二 男はこれからどうするのだろうか？ 生と死の間にある女を何もない砂浜に置き去りにしなければならないのだろうか？ 騎士の掟が男を躊躇させ、憐れみの情が男を立ち止まらせるが、過酷な使命に引きずられて男は進み出す。男は出発し、男を導く婦人（運命の女神）の髪が軽やかな西風に靡く。黄金色の船の帆は大海原を飛ぶよう

に進み、男が見つめている海岸は瞬く間に男の視界から消える。

復讐の誓い

六十三 意識が戻った女は物音ひとつしない漠とした周囲の海岸を隅々まで見渡した。「やはり行つてしまった」と言うことさらに続けた、「死ぬかもしれないわたしをここに残すことに、ためらいを感じなかったのかしら。かの裏切り者は危険な状態にあったわたしに、ひとときの時間を割こうとも、わずかの助けを与えようとしなかったのかしら。でも、わたしはかれのことがまだ愛おしい、この浜辺で仕返しをすることなく泣き続け、じつとしていなければならないの？ 六十四 泣くことがわたしの為になるというの？ 他の武器を、他の術を、わたしは使うことができないかしら？ 嗚呼！ あの邪悪な男をこれからも追いつけてやるわ、地獄に隠れることも、天上に避難することもできないようにしてやるわ。かれに追いついたら、かれを捕え、心臓を引き裂き、体をばらして吊してやるわ、世の非情な男たちへの見せしめとして。残酷さにかけてはかれが一流で……、そのかれをわたしは残酷さにおいて凌ぐうとしている……、いったいわたしはどうなってしまったの、何を言っているの？ 六十五 哀れなわたしアルミードよ、きみ（「わたし」）はかれを虜としていたときに、この残酷な男に對して残酷な行為を働くべきだったのであり、それは全くもって正當な仕返しだった。今になって怒りを募らせても遅いのであり、怒りは空回りするだけだ。しかし、もし美貌や狡猾な術策に能わぬことがないならば、望みがまったくないわけではないだろう。おお、侮辱を受けたわが美貌よ、おまえがやらないといけないのだ（侮辱はおまえに對してなされたのだから）、大いなる復讐を。六十六 かのおぞまし

い頭を切断した者に、わたしの美貌を褒美として与えよう。おお、わたしの愛の虜となつている名高き兵士たちよ、果たすことは困難ではあるが、正義のために果たされねばならぬ復讐をおまえたちに命じよう。莫大な富をいずれ相続するわたしは、みずからの身を復讐の報償として差し出す決意をする。もしわたしにその資格がないのであれば、わが美貌よ、おまえは役に立たない自然の賜だ。六十七 おまえは不幸の源であり、おまえをわたしは受け入れない。そして同時に憎む、女王であることを、生きていることを、生まれてきたことを。わたしがまだ生きているのは、甘美な復讐に期待を寄せているから、ただそれだけの理由なのだ。」このような言葉を途切れ途切れに吐き、怒りに震え、無人の浜辺から離れていくが、髪を振り乱し、目を斜めにして、顔を真っ赤にしたその姿を見れば、精神に生じている異常の程が察せられる。

六十八 自らの館に戻ったとき、恐ろしい呪文を唱えて、地獄から三百もの悪魔たちを呼び寄せる。空は暗い雲に包まれ、あつという間に大いなる永遠の天体〔太陽〕が青白い光を発するようになり、山々の頂上は強風に打ちつけられる。聞くがよい、地下から響いてくる地獄の喧噪を。建物の周りからは、怒気を含んだ鋭い叫びや金切り声、振動音、獣の遠吠えが聞こえてくる。六十九 夜よりも濃い黒い大気に建物全体が包み込まれ、そこには一筋の光も差し込まないが、深い霧に覆われた一角だけはかすかな輝きを呈している。闇はやがて引き下がり、太陽が再び青白く輝き始める。しかし心地よい微風はいっとうに戻らず、館も姿を消し、その跡形さえもないので、「館がここにあった」と言うこともできない。七十 空に浮かぶ雲はときに巨大な

構造物をかたち作るが、それが——風に流されたり太陽の熱を受けたりして——崩れてしまうように、「あるいは」病人が幻に見る像がたちまち壊れてしまうように、アルミードの館は消滅し、自然がそこに作りだした山々と不気味な風景だけが残った。アルミードは準備していた馬車に乗り込み、空に向かっていつものごとく飛び立つ。七十一 雲を押し分け、風を切つて、アルミードは黒い雲と轟音を発する嵐に包まれて大空を進み、南半球にある海岸や未知の人々たちが住む土地を越える。アルケイデリスが定めた境界〔ジブラルタル海峡〕を過ぎたとき、ヘスペリア人やマウレーターニア人の国には近づかず、海上をそのまま飛び続け、シリアの岸辺に到達する。七十二 しかし、そこからダマスカスのほうには進まず、以前は愛着があった祖国の様子を見ようともしないで、みずからの城が波間に建っている不毛の海浜へと馬車を進める。城に着くと召使いや侍女たちに姿を見られないように振る舞い、隠された部屋に引きこもる。不安な気持ちに駆られつつ、あれこれと想いを巡らす、すぐに怒りが恥の感情に取って代わる。七十三 「やはりわたしは行くことにするわ」、アルミードはつぶやく、「エジプトの王がアジアの軍勢を動かす前に。あらゆる策をもう一度講じて、人を欺くような行動にわたしは徹するわ、剣や弓を用いて、もっとも強い者たちを奴隷にして、かれらを互いに競わせるわ。わたしの復讐が、たとえ尊厳や名誉にそうした行動が相応しくなくとも、少しでも果たされるように。七十四 わたしの師匠である叔父〔イドラオーテ〕はわたしを非難するのではなく、自分を責めればいいわ。かよいい女性でありながら向こう見ずな性格のわたしを操つて、わたしに無謀な仕事をさせたのは、そもそも叔父だったのですか

ら。かれに命じられてわたしは流浪の旅に出て、ますます大胆で、恥知らずな女となった。わたしが愛のために不相応なことをして、怒りのためにこれからもすることは、すべてかれの責任なのだわ。^(二十五)

七十五 このような決意のことばを述べると、騎士たちや婦人たちや小姓や召使いたちを急いで寄せ集める。豪華な装飾具や衣装に身を包んで、その仕立ての素晴らしさや王家の財力を誇示し、旅立つ。太陽の下でも、月の下でも、眠ることなく、また休むこともなく進み、友なる軍勢が集結しているガザの晴れ渡った海岸に到着する。

註

(一)

原作はトルクワート・タッソ著『解放されたエルサレム』(一五八一年)。今回は第十五歌八節から第十六歌最後までを訳出する。十字軍兵士のカルロとウバルドによる航海の段と、リナルドを魔女アルミダのもとから救出する段である。訳文中の(一)は筆者による補足説明。(二)は原文に付いているもの。古代ローマの政治家ポンペイウスはエジプトで暗殺され、カシウス山の土中に埋葬された。ルーカーヌスの歴史叙事詩『バルサリア(内乱)』第八巻に暗殺と埋葬に関する記述が含まれている。

(二)

ナイル川の水が天から注いでいることは第十七歌十四節を、その七つの河口については第十三歌五十四節をそれぞれ参照。

(四)

トロメッタはここで語られる五つの町(ギリシヤ人による建設)の一つ。レーテ川は冥界から流れ出るとされる。レーテ川は冥界から流れ出るとされる。

(五)

ウエルギリウス、『アエネーイス』第四歌九十七節。

(六)

ギリシヤ神話における英雄オデュッセウスは、トロイア戦争後の十年間を放浪に費やし、祖国に戻ったとされる。しかし、ここでタッソが依拠する『神曲』地獄篇第二六歌によると、オデュッセウスは帰国後に再び部下たちを連れて航海に出て、「ヘーラクレースの柱」を越えて人間が行くことのできない大洋

に漕ぎ出たため、天罰を受けたとされる。

(七)

マゼランによる地球一周の航海のことを言っている。

(八)

いずれもギリシヤ神話上で長旅をしたことで知られる。パッコス(ギリシヤ神話の酒神ディオニュソスの別名)。

(九)

大航海時代の探検家たちの偉業は、ヴァスコ・ダ・ガマによるインド航路開拓を称えたポルトガルのカモンイスなど、タッソと同時代の西洋人詩人たちによって歌われた。コロンブスの航海は後の時代のイタリア詩において、題材としてさほど取り上げられなかった。

(十)

カナリア諸島のテネリフェ島にあるティデ山(標高三七一八)を指す。

(十二)

運命の女神に導かれた二兵士はパレスチナからカナリア群島まで航海するが、いわゆる「著者によって破棄された詩行」(一五八四年版などの巻末に掲載)では航海がエジプトから開始され、南米大陸に添って南下し、パタゴニアを通過して、マゼラン海峡を越え、太平洋に出る。すなわち、第十五歌第三十節で言及されたマゼランの航路をなぞって進む。だが、そうすると航海の時間が物語の統一に支障を来すほど長くなる(未知の海を十日以上航行することになる)ので、一五七五―六六年の校正段階で、タッソは当初の案に変更を加えている。それに伴い、太平洋上に置かれる予定であったアルミダの館もカナリア諸島のテネリフェ島に置かれることとなった。なお、当初の詩行は一五八〇年にチェリオ・マラスビーナによって出版された不完全な版には掲載されている。また、『征服されたエルサレム』では航海の場面全体が削除され、アルミダの館も戦地に近いレバノンに置かれる。

(十三)

第十四歌六十九―七十一節参照。

(十四)

第十四歌七十三節および第十五歌一節で述べられた「杖」のこと。

五十四節と五十五節の間にも、発刊当初の版では註十一で述べた「著者によって破棄された詩行」の一部(八行詩が全部で十連)が置かれていた。そこでは宮殿の城門を守る衛兵について語られ、この衛兵は半身が豹の怪物であったが、二人の十字軍兵士(カルロとウバルド)によって殺害される。第十六歌三十五節にあるその衛兵への言及は、タッソが衛兵の殺害に関する部分を削除したときに、本来一緒に削除されるべきであった。このタッソの消し忘れについては一五八四年にタッソとアリオストの優劣を論じたカミッロ・ベッレグリーノによって指摘されている(Camillo Pellegrino, *Il Carrida o vero della epica poesia*, 156, in *Trattati di poetica e retorica del Cinquecento*, Vol.III, 1972, Bari)。

(十五)

笑いの噴水の水を飲むと笑いが抑えられなくなり、死ぬとされた(第十四歌七十四節参照)。笑いの噴水についてタツソは、「ペトラルカをはじめ多くの詩人たちが語り、地理学者たちによってその存在が認められている」としたうえで、衛兵の物語(註十四参照)を「削除した代わりに」挿入すると述べている(一五七六年三月の書簡)。

(十六)

ここでは娘の下半身が水の中に隠されているが、当初の原稿では露わにされていた。すなわち、五十九節の後半は前述の一五八〇年版では「一人の娘は眼をより楽しませる秘密の部分をつちまち露わにして、やがて水から出て覆われていない美しい全裸を天に晒す」となっている。

(十七)

ギリシャ神話中の英雄ヘーラクレース(青年期までのヘーラクレースはアルケイデースと称していた)は神託にしたがって奴隷となり、小アジアの王国リューデイアーの女王オンバレーに買い取られた。女王の王宮では女装して女王に仕え、糸紡ぎなど女性の仕事に従事した。なお、マイオニア人は王国の域内に居住していた民族。

(十八)

イオレーはオンバレーの間違いで、タツソの誤解による。

(十九)

紀元前三十一年、アントーニウスとクレオパトラの連合軍はアクティオン海戦でオクタウィアヌスの軍に敗れた。アントーニウスは部下から見捨てられ、クレオパトラの腕にかかえられて死んだ。

(二十)

エーゲ海に注ぐ小アジアの川。

(二十一)

第十四歌七十六節参照。

(二十二)

十七節以下の魔女と騎士の場面はとりわけバロック期の画家や音楽家に題材を提供した。

(二十三)

アッイオはエステ家の祖となったローマの一族、ソフィアは第一歌五十七節で述べられたようにリナルドの母で、リナルドの父であるエステ家のペルトルドと共に歴史上の人物。

(二十四)

紀元前四世紀の高潔なギリシャ人哲学者。自分を誘惑する美しい娼婦に対して彫像のように抵抗したとされる。ここでのアルミータは誘惑に失敗して悔しがる娼婦の姿と重なる。

(二十五)

魔術師イドラオーテ。第四歌二十節以下を参照。

執筆者

水野

留規(音楽学部教養教育 教授)